

マジンガーZ

<https://majingai.x.fc2.com>

『マジンガーZ』（マジンガーゼット）は、永井豪の漫画作品、原作者を共にする東映動画制作のテレビアニメ、桜多吾作によるコミカライズ作品の題名、またこれら3作品で描かれる主役の巨大ロボットの名称。本項では原作者の漫画とテレビアニメーション、および後世影響等について述べる。

【概要】

天才科学者兜十蔵博士は世界征服を企むDr.ヘルから地球を守るために、神にも悪魔にもなれる能力を秘めたスーパーロボット「マジンガーZ」を作り出した。兜十蔵博士はDr.ヘル攻撃によって亡くなってしまったが、彼が作ったマジンガーZは孫の兜甲児に託され、甲児はDr.ヘルとDr.ヘルが作り出した機械獣軍団の野望を打ち砕くためにマジンガーZで戦う決意を固める。巨大な人型ロボットに主人公が乗り込み操縦するという、「巨大ロボットアニメ」と呼ばれる分野に分類される初めての作品である。平均視聴率22.1%（最高視聴率は、第68話の30.4%。ビデオリサーチ関東地区調べ）の大ヒット番組となり、続編の『グレートマジンガー』『UFOロボ グレンダイザー』と合わせると4年を越える長期シリーズとなった。永井は本来はシリーズとしては2部、もしくは3部作として構想されており、完結編にはゴッドマジンガーを冠させる予定であったと、文庫版マジンガーZのインタビューなどで語っている。その後日本以外でも放映され、視聴率80%を稼いだスペインやイタリアなどヨーロッパを初めとして世界各国で人気を博している。スペインにはマジンガーZの像がある。

【マジンガーZ】

『鉄（くろがね）の城』と謳われる搭乗型のスーパーロボット。1972年10月10日完成。全長18m、重量20t。兜十蔵博士の手によって、Dr.ヘル野望を阻むべく別荘の地下で秘密裡に造り上げられていた。装甲は超合金Z、動力は光子力エンジン。最高出力は建造当時は50万馬力、1回目の出力増強後は65万馬力、2回目の出力増強後は95万馬力、『グレートマジンガー』終盤ではさらに強化されボディを超合金ニューZ化。戦闘能力はアメリカ海軍第7艦隊に匹敵する。光子力研究所敷地内の汚水処理場の水を割って発進する（第3話から）。兜甲児の乗るホバーパイルダー、もしくは揚力を得るダクトファンがジェットエンジンに換装されたジェットパイルダーが頭部に合体（パイルダー・オン）することでコントロール可能となる。アニメーション上の演出として、Zの有する様々な武器をパイロットの甲児が手探りで模索しながら駆使し、折々にパワーアップ改造を施しつつ徐々に強化されていく手法が取られている。その最たるものが第34話より装備されたジェットスクランダーの存在である。当初Zは単独では空を飛ばず、空飛ぶ機械獣に翻弄されるケースが多々見られたが、ジェットスクランダーとの合体（スクランダー・クロス）によりマッハ3（スクランダー改造後マッハ4.5）の飛行能力を得て弱点を克服した。ジェットスクランダー使用時の限界高度は3万mとされている。追加装備ゆえに空での機動性は後継機のグレートマジンガーには一歩劣る。アニメ放送開始直後の数話は「手首から先が白く彩色されている」「胸の放熱板の形状が丸みを帯びている」「足の形状が角張っている」「光子力ビームの色やブレストファイヤーの放射エフェクトが不統一」といった作画の不統一があった。甲児も当初は技名を叫ばず、無言で繰り出しており、第5話で「ブレストファイヤー」と叫んだのが初めて。また、顎の部分の設定が無く作画監督の判断で作画されていた。オンエア期間がそのままリアルな戦闘期間となり、実に2年間という長期を戦い抜き、そのためにオーバーホール（綿密なメンテナンス修理）が行われるエピソードも後半で使用された。Dr.ヘル攻撃を退けたものの、最終回にて、甲児のコンディション不良や修理不足によりミケーネ帝国の戦闘獣の前に歯が立たずに完敗を喫し、大破する。その後にグレートマジンガーに準じた性能に大改装され、装甲は超合金ニューZに換装され、本体も軽量化された。団龍彦の小説作品『スーパーロボット大戦』では闇の帝王達の策略により、遠い未来で本物と全く同じ性能を持つレプリカのマジンガーZを未来に飛ばされた甲児が手に入れるように仕向けられた。その事実が示唆されるまで、甲児達はこのマジンガーZがレプリカであることに全く気付かなかった。現代に残されたオリジナルのマジンガーZはゴッドマジンガーに改造されることとなる。出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』



2021.05.14

マジンガーZ 1072年

【ダイアナンA】

弓教授が建造した女性型戦闘サポート用ロボットであり、第76話から登場するアフロダイAの後継機で、同じくさやかが搭乗する。全体的にアフロダイよりもマジンガーZに近いデザインとなり、武装も増強された。スカーレットモビルというバイクがコクピットになる。出撃の際は、さやかの「ダイアナンA・ゴー!!」の声で光子力研究所の格納庫より姿を現し、「オーロラ光線・発射!!」の声で後頭部より虹状の七色に光る光線がスカーレットモビルの手前に向け発射され、その上を橋を渡るように登り、頭部まで走行してドッキングする。光子力で駆動し、最高出力は（アフロダイAと同じく）12万馬力。超合金Z製のボディー。出番が終盤近くということもあってか、戦闘用の割に戦果はアフロダイを下回り、勝利したのは第89話でギラニアβ5だけであった。マジンガーZと共に『グレートマジンガー』終盤に出てきた時には超合金ニューZに換装されていたと思われる。小説版『スーパーロボット大戦』では専用のスクランダーが開発されたが、コクピットが改造されたという描写はないため開放型のコクピットのまま空を飛ぶことになる。なお、スーパーロボット大戦シリーズではバイクがコクピットになったまま、宇宙に出ていたりする。『スーパーロボット大戦α』ではさやかがボスロボットが宇宙に出ることにツッコミを入れた際、「さやかには言われたくない」とボスに逆にツッコミ返された。
出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

ダイアナンA
全高 16 m 重量 18 t

【アフロダイA】

弓教授がジャパニウム採掘のために建造した女性型の非戦闘用ロボット。弓教授の娘さやかが操縦。コクピットは分離せず専用格納庫で後頭部のハッチから乗り込む。採掘用にしては細身で5本指のマニピュレーターを持つ。永井豪によれば、頭部のデザインは西洋の女性の結い上げた髪形や帽子をモチーフにしているとのこと。そのため元デザインは頭部が異様に大きく、アニメ化に際して作画監督羽根章悦によってリファインされた。本編では視界良好な反面、ガラス部が多く、コクピット部に攻撃を受けさやかが負傷する場面が何度かあった。Dr.ヘルによる侵攻が始まってから急遽武装が施された（第4話よりミサイル装備）ためか胸のミサイルは規格が一定していなかった。さやかは完全な戦闘用への改造を望むが、甲児や弓教授らに却下されている（第8話）。非戦闘用機のためZのサポートメカとして機械獣の武装や戦法などを身を持って実証する小手調べの役割を担うことがほとんどであるため、攻撃を受けて破壊される頻度が高く、腕や脚を失ったり胴体を真っ二つにされたことさえある。光子力で駆動し、最高出力は12万馬力。合金Z（漫画版の設定）という超合金Zよりもグレードの低い金属（諸説あり、他にはジャパニウム合金とも言われている）に覆われている。後に超合金Zに換装された（第41話）模様だが、マジンガーZより外板が薄いらしく以後も手足を破壊されるなどの描写があった。第74話でZをかばって妖機械獣ハルピアπ7の羽根ミサイル攻撃を全身に受け大破、残骸はZのルストハリケーンで葬送された。非力ながらも健闘しており、ミネルバX（第38話）・ガンビーナM5（第49話）・ユーバリンT9（第56話）をいずれも光子カミサイルで倒している。なお、シナリオではダイアナン4やホルゾンV3もアフロダイが倒す予定だった。第70話で指先からバーナーを出して、ダメージを受けたロボットを修理する描写がある。

アフロダイA
全高 16 m 重量 18 t

【弓 弦之助（ゆみげんのすけ）教授】声 - 八奈見乗児
光子力研究所の最高責任者。さやかの父。元々は兜十蔵博士の一番弟子で助手を務めていた。常に冷静沈着で、悪には屈しない強い心を持っている。アフロダイA・ダイアナンAを開発し、ジェットスクランダーやジェットパイルダーなどマジンガーZに数々のパワーアップを行ない、世界平和に多大な貢献を果たす。兜兄弟を実子と変わらず扱い、甲児とさやかの争いも兄弟喧嘩程度にしか思っておらず、優しくたしなめる。兜兄弟からは「先生」と呼ばれており絶大な尊敬を集めている。甲児とさやかの留学後はシローを引取ることになるが、シロー本人の希望で科学要塞研究所に預ける。所長の兜剣造の素性を理解していたが、剣造の希望もありシローの実父であることは告げなかった。

2021.05.15

マジンガーZ 1977年

【ボスポロット】

本来はボスロボットであり、ボスポロットは愛称である。第48話でもりもり・のっそり・せわし博士により建造されたロボット。ボスが専用ロボット欲しさに三博士を恐喝し、拉致監禁して建造させた。材料が自動車等のスクラップだったということもあり驚異的なスピードで完成。大型ダンプカーのようにハンドルを回して操縦する。頭部の口に相当するスリット部分が乗降口になっているが、贅沢だという理由で扉もガラスも装備されておらず、操縦席は吹きさらしである。内部に座席ではなく、半畳の畳1枚を敷いた縁台が操縦席になっている。室内はかなり広く作られており、ボス達3人が乗っても空間には大きな余裕がある。またインテリアとして後部壁面に柱時計があり、座席脇のレーダースクリーンのケーシングは和式便器、その隣には中古のテレビを流用した無線通信のモニター、レバー部分の土台としてガスコンロが置かれ、配電盤の蓋は冷蔵庫のドア、天井から伸びる伝声管は掃除機の吸い口とホースを流用するなど内部にもリサイクルの精神が行き届いている。基本材料がスクラップなせいで、総合的なスペックはマジンガーZはおろか、アフロダイAにさえ劣る。しかし三博士の腕は確かで、スクラップで出来ているにもかかわらず出力は12万馬力と強力であり、その攻撃力で妖機械獣サーペンター16（第75話）と機械獣ブラッキーF7（第80話）を結果的に撃破している（映画『マジンガーZ対暗黒大將軍』でも戦闘獣ダンテを不意打ちで倒している）。当初は単なるギャグメーカーで、敵の罠にかかりZの足を引っ張ることもあったが、次第にZのサポート役としての地位を確立し、勝利に貢献していく。またコメディリリーフとして表情豊かな頭部がポロットと外れるというギャグも再三にわたって披露。Zに張り合おうと空を飛ぶことへ執拗に挑戦しては失敗を繰り返していた（この芸風は次作『グレートマジンガー』へも受け継がれ、遂に『グレート』第43話で悲願達成となる）。

武装は主にその怪力のみ（『スーパーロボット大戦』シリーズには「ポロットパンチ」という武装があるが、単に殴っているだけである）。完成当初、ボスはマジンガーZと同じような武器がポロットに取り付けられていると思っていたが、三博士から「ロケットパンチを撃つと衝撃でバラバラになる」「ブレストファイヤーを使えば熱に耐えきれず溶けてしまう」「ルストハリケーンを使うと錆びて腐食してしまう」等の理由から、武器は取り付けられないと言われている。ただ第85話では、腹部が開いてミサイルパンチのようなミサイルを発射するという機能を見せた。また三博士も、強度の問題で武装は一切付けられないと断った上で「—だが力は強いぞ、マジンガーなんか目じゃない」と述べている。どんなエネルギーでも稼働可能という特徴がある。ボスがパイルダーから光子力エネルギーを盗んでしまい、甲児が補給に戻った際にマジンガーが強奪される、というエピソードもあった（第73話）。

第75話ではボスらと共に、新たな機体が未完成で出撃できないさやかが同乗している。次作『グレートマジンガー』へも全話にレギュラー出演し、さらに『UFOロボ グレンダイザー』にも2回ゲスト出演したことにより、東映マジンガーシリーズ3作全てに出演し本編中で活躍した唯一の機体となった。児童層への人気も確かな物があり、榎村ただしによるコミカライズで「ジャンジャジャ〜ン ボスポロットだい」「おなり〜っ ポロツ殿だい」など、ボスポロットを主役に据えたスピンオフ漫画がテレビマガジンに連載された。「スーパーロボット大戦」シリーズでは性能が軒並み低く設定されている。特に旧作品では射程1でしか攻撃できないという致命的な弱点があった。しかし、使われている材料がスクラップのおかげで撃墜された時の修理費が作品で一番と言えるほどの安さを持ち、PS2以降の作品では性能が見直され、旧作品よりはずっと戦える性能にはなっている。また、『スーパーロボット大戦EX』ではシュテドニアス軍に「他に使い道がないから」と補給装置が搭載され、以降の作品で世界観等を共有してなくてもボスポロットに補給装置（作品によっては修理装置も）が搭載されている。『新スーパーロボット大戦』にはボスポロットを改造し気密性を上げるために空気ボンベらしきものに繋がったガラス鉢のようなものを頭部に被せ、ミサイルを腕に抱えている「スーパーボスポロット」が登場している。ボスポロットの基本デザインは、当時存在した公式ファンクラブ「マジンガーズクラブ」で公募された物を基にしているとされていたが、漫画『激マン!Z&グレート編』第5話にて明かされた裏話によると、実際には「募集が集まるのを待っているアニメ製作 間に合いませんので」という理由でボスポロットは最初から永井豪のデザインで決定しており、公募は作品を盛り上げるためのイベントでしかなくデザイン案としては反映されていなかったことが語られている。永井豪はこの件に関し、漫画誌面上で「これに応募した憶えのある人 ゴメンね…? 君がはずれたのはデザインが悪かったせいではないので…自信を持ってネ」と詫言っている。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』



2021.05.15

マジンガーZ

【作品誕生までの経緯】

『マジンガーZ』は、同じ永井豪原作の東映動画作品である『デビルマン』についての打ち合わせの席上で、新たな提案をきっかけに企画が始まった作品であり、原作者による連載漫画と東映動画によるTVアニメが同時進行に近い形で世に送り出された。永井豪は、渋滞に巻き込まれた自動車を見ていた時に、「自動車から脚が伸びて前の車を（またいで）乗り越えていけたらいいのに」と感じたことが“乗り込んで操縦するロボット”の着想の根源になったと方々で語っている。永井は、子供の頃夢中になって読んだ『鉄腕アトム』や『鉄人28号』といった「ロボットもの」の、それらとは全く違う設定の作品を描いて見たいという願望があったというが、着想としては「ロボットもの」の分野に新しい設定を持ち込んだというよりは、乗り物の解釈を拡大してロボットに行き着いた……というものになっている。これは、作品が『エネルギーZ』または『アイアンZ』と呼ばれていたまだ初期の頃の構想で、「主人公が乗ったバイクがロボットの頭部に登り、合体し操縦する」という設定であった点からも読み取れる。ただし、この設定は当時人気の絶頂期にあった『仮面ライダー』に類似するという理由で、飛行メカのホバーパイルダーによる結合方式に改変され、バイク=コクピットという案は後にダイアナンAの操縦方法として流用された。

【後続作品への影響】

本作は、ロボットに数々の超兵器を内蔵させること、パートナーとなる女性型ロボットアフロダイA・ダイアナンAの登場、三枚目のお笑い担当ロボットボスボットの登場、飛行用パーツ・ジェットスクランダーの登場、新兵器の追加や弱点の克服といったパワーアップ描写、主役機体の交代（最終回におけるグレートマジンガーの登場）など、後続のロボットアニメ作品で多用されることになる要素を、数多く生み出した。デザイン面においても後続作品に大きな影響を残し、三白眼をはじめとする本作のロボットのデザインラインが、後続の巨大ロボットの多くに色濃く影響を残している。また、「上腕と腹と大腿部が白」の配色は、マジンガーシリーズとは直接関係の無いコン・バトラーV、アーマードトルーパー、実写特撮のダイデンジンにまで踏襲され、それ以降の1970年代の作品における巨大ロボットの基本配色となった。その後も、この配色の影響下にあるロボットデザインは多い。アニメのエンディングに設計図・透視図（宮武一貴による）が使われたり、雑誌でさまざまな裏設定が公開されるなど、作品の細部を作品外から補完する試みも行われた。こうした手法は後年のSF作品でも多く見られるが、そういった点も本作が先陣を切った。1996年から1997年にかけて放送されたスーパー戦隊シリーズ第20作『激走戦隊カーレンジャー』では、マジンガーZそっくりの敵ロボット・バリンガーZを登場させようとしたが、打ち上げパーティーで大竹宏の挨拶からそのことを知った東映上層部がダイナミックプロに配慮して出した自粛命令により、アフレコまで完了していたものがお蔵入りになるという事態になった。
出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』



1972年

マジンガーZ

【商業面での影響】

この作品の大ヒットによって「超合金」や「ジャンボマジンガー」などの関連玩具が爆発的に売れた。雑誌での記事展開なども含めた商業的な面でのシステムを確立したという点でもマジンガーZは画期的であり、日本アニメ及びそのキャラクタービジネスにとって重要なターニングポイントになったとされる。

本作放映以前はテレビアニメの制作本数は減少傾向にあり、辻真先によると「テレビアニメはそのまま死滅の道を辿ったかもしれない」という時期であった。

永井豪によると本作の企画時、巨大ロボットは売れないと判断されたためスポンサーのポピー（現：バンダイ）は乗り気ではなかったが、本作の高視聴率が判明すると商品化に動いた。ジャンボマジンガーは全長約60cmの大きさが子供に受け、50万個のヒットになり、巨大ロボットアニメの商業性を示した。本作以降、玩具メーカーがアニメのスポンサーになることが増え、これまで菓子メーカー主導だったアニメは玩具メーカー主導になり、テレビアニメの制作本数が増加する。

辻真先は玩具メーカーがテレビアニメを救ったように述べている。また当時、東映動画は東映の実写キャラクターの著作権も取り扱っており、同社の著作権収入は実写9、アニメ1の割合だった。それが本作のヒットによりアニメの方が著作権収入が上になった。このように本作は実写優位だった当時の市場環境を覆し、アニメの価値を示した作品である。本作の玩具を開発した村上克司は、「マジンガーがなければ、この超合金もなく、その後の私もどうなっていたのか。マジンガーには心から感謝しています」と述べている。

水木一郎の歌う主題歌レコードも、日本で70万枚を超える大ヒットになった。このレコードにはオープニング、エンディング以外に挿入歌「Zのテーマ」も収録されている。この曲はもともと主題歌として製作されたが、「曲調が弱い」との理由で没になったものの、出来が良かったのでほぼ毎回マジンガー出撃シーンのBGMとして使用された。

この時間帯のアニメ主題歌では『アタックNo.1』と並ぶ売上枚数。

【漫画】

アニメ主導のタイトルということもあり、『マジンガーZ』の漫画版は紆余曲折を辿ることになる。永井は『ハレンチ学園』の次作品として『週刊少年ジャンプ』に売り込みをかけたが、編集部は連載に難色を示した。『ハレンチ』の後釜として同じようなアダルトギャグ漫画を求めていた編集部の要求と合わなかったのが理由とされる。テレビ局主導での漫画制作に不満を示していたデスクの西村繁男は連載に強硬に反対したが、編集長の長野規が永井のマネージャーの強い説得に折れ、連載を許可することになった。その後、永井はアニメ番組スポンサーの強い要望で講談社『テレビマガジン』にも連載を開始することになる。『テレマガ』は元々『仮面ライダー』中心の雑誌としてスタートしたが、後番組として

『仮面ライダーV3』が出た時点で、近い将来のライダーブームの落ち込みを予測しており、『ライダー』に代わる目玉キャラクターを探していた編集部にとって「まさに渡りに船」であった。だが、『テレマガ』の連載を受けたことから長野の態度が一変、人気は高かったにもかかわらずジャンプ版の連載は打ち切りとなる。当時、専属契約制度を導入しつつあった『週刊少年ジャンプ』にとって、ライバル出版社の雑誌に同タイトルの連載を併載することは到底許容しがたいことであった。

このころダイナミックプロという会社組織となり（兄弟が社長）、マネージャーが本人の知りえないところで原稿料の吊り上げを行っていたことがのちに判明。これがジャンプへの掲載が疎遠になった理由ではないか、との証言も残っている。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

1972年

2021.05.16

<https://majingai.x.fc2.com>

マジンガーZ 1972年

【兜 甲児 (かぶと こうじ)】声 - 石丸博也

本作の主人公。祖父の十蔵が残したスーパーロボット・マジンガーZの操縦者。年齢16歳の高校生。抜群の運動神経を持ち、鍛え抜かれたオートバイテクニックを応用してZの性能を余すところなく引き出した。東京に在住していたが、祖父の死をきっかけに弓教授が用意した光子力研究所近郊の木造住宅に移り住み、出勤要請が出るとパイルダー号を発進させる。しかし自宅も鉄十字軍の襲撃によって大破し、その後は研究所に移り住んだ。シローの宿題に苦戦するなど、ふだんの勉強はあまり得意でないが、戦闘における一瞬の判断力には鋭いものがある。性格はやや直情径行気味でおちょこちょいな面もあるが、祖父の影響もあり正義を愛し決して悪を許さない江戸っ子気質の熱血漢。弓さやかとは互いに少なからず戦闘でのパートナー以上の好意を抱いているものの、双方とも気が強いため、つい喧嘩になることが多々あった。弟シローに対しては唯一の肉親ということもあり、面倒見の良い兄貴ぶりを見せている。社交的な性格であり目上には礼儀正しく所員からも信望は厚い。私服は白いタートルネックの長袖シャツに紺色の長ズボンであることがほとんど。初期話数ではZの武装を知らなかったため無言で技を繰り出していたが、第5話以降は技名を叫びながら繰り出すスタイルへと徐々に移行した。第3話ラストで戦闘の衝撃に耐えられるようヘルメットと戦闘服を弓教授と三博士より贈られ、第4話以降着用して出撃するようになる。第91話でDr.ヘルメットを壊滅させたが、第92話で新たな敵ミケーネの戦闘獣によってZは戦闘不能となり、甲児も重傷を負う。回復後、さやかと共に日本を立ちワトソン博士の下でロボット工学を学ぶべくワトソン研究所へ留学。

【弓 さやか (ゆみ さやか)】声 - 松島トモ子 (第1話 - 第13話) → 松島みのり (第14話 - 第39話・SRW) → 江川菜子 (第40話 - 第92話)

本作のヒロイン。弓弦之助教授の一人娘で、アフロダイA・ダイアナンAの操縦者。高校には通わず研究所で教育を受けており、学生生活に少なからず憧れている。お転婆で勝気な性格。甲児に好意を寄せるが、素直になれず喧嘩することが多い。物凄く嫉妬心が強く、みさとはおろかミネルバXにさえもヤキモチを焼いたほど。『マジンガーZ対デビルマン』においては「ジェットスクランダーに比べたらガールフレンドなんて…」という甲児のセリフにも過敏に反応した。しかし、それも真実に甲児を愛する故の嫉妬であり、死線をさまよう甲児に対して独白したことも度々あった。一方、女性に前線で戦わせることをよしとしない甲児と対立することもあり、アフロダイAを戦闘用に改造することに反対した甲児を恩知らず呼ばわりして平手打ちを見舞うなど、高慢ちきな鼻っ柱の強さも顕著である。ヘアバンドを常に着用、色はピンク以外にもいくつかのバリエーションがある。第38話まで黄色いツナギ風の戦闘服に茶色のブーツ姿だったが、第39話以降ピンクと白のヘルメット及びミニスカタイプタイプの戦闘服、白いロングブーツ姿に変更された。弱点はくすぐり。ボスポロット登場後はボスとコンビを組むことも多くなり、コミカルな言動も目立ってくる。戦力的にはZに劣り甲児から足手纏い扱いされることもあったが、精神的なパートナーとして甲児をフォローすることも多かった。最終回で甲児と共に渡米。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

【スタッフ】

- ・ 原作 - 永井豪とダイナミックプロ
- ・ 機械獣デザイン原案 - 永井豪、石川賢、五十子勝、桜多吾作、蛭田充、風進、村祭まこと
- ・ 企画 - 春日東 (旭通信社)、別所孝治 (フジテレビ)、有賀健、横山賢二 (東映動画)
- ・ 音楽 - 渡辺宙明
- ・ キャラクターデザイン - 羽根章悦 (前期)、森下圭介 (後期)
- ・ 制作 - 東映動画、旭通信社

2021.05.16



マジンガーZ 1972年

【Dr.ヘル】声 - 富田耕生
悪の天才科学者。顔色が紫。地中海のバードス島で古代ミケーネの遺跡を発見、そこに残されていたロボットの技術をもとに作り上げた機械獣軍団を率いて世界征服を狙う。冷酷非情だが部下には情けをかけることも。第91話で飛行要塞グールを撃破されブロッケン伯爵と共に死亡した。しかし、後にミケーネ帝国によって戦闘獣へ改造され地獄大元帥として復活することになる。
出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

【ブロッケン伯爵】声 - 滝口順平
第39話から登場した、元ナチスの鬼将校。爆風で吹き飛ばされた首を自ら拾い上げて走った、という武勇伝を持つ。ナチスに招かれていたDr.ヘルの手でサイボーグとして甦り、戦後は彼の部下となる。首が胴体から離れて浮遊し、大抵の場合は首を脇に抱えている。武器は腰のサーベルと拳銃。あしゅら男爵とは仲が悪く、協同作戦であっても互いの足を引っ張り合う事もしばしば。飛行要塞グールを指揮し、鉄十字軍団を率いる。ゴーゴン大公に意見しては首をムチではたかれる場面が再三見られる。第82話ではマジンガーZを操縦したが、まともに動かせない内に甲児に奪回されてしまった。最後は、第91話でZの猛攻を受けて要塞グールを撃破されヘルと共に死亡。デザイン原案は永井豪。あしゅら男爵が縦割りだったので、ブロッケン伯爵は横割りになったとのこと。



【あしゅら男爵】声 - 柴田秀勝 (男、タイトルコールも兼任) / 北浜晴子 (女)
Dr.ヘルが古代ミケーネ人の夫婦のミイラを組み合わせさせてサイボーグ化した幹部。本人から見て右半身が女、左半身が男。ヘルの腰のバックルが輝くと頭部と首が締め付けられる仕掛けがあり、決して逆らえない。武器は手に持つ「バードスの杖」から発する光線。また、女性に変身して攪乱させる作戦を得意としており、その際は声も女性側のものに統一。作戦に失敗しては「申し訳ございません…Dr.ヘル様」とヘルに土下座する。海底要塞サルードやブードを指揮し、鉄仮面軍団 (あしゅら軍団) を率いる。ヘルへの忠誠心は厚いが、油断や慢心が多くマジンガーZに敗れ続ける。最後はブロッケンとの反目の末にヘルの元を飛び出し、ゴーゴン大公の支援を受けて単身マジンガーに挑み、ブードでZに特攻し壮絶な戦死を遂げた (第78話)。ヘルはその死に涙し死後、地獄城にはあしゅらの銅像が建てられている。デザイン原案は石川賢。原案ラフ画では不気味な男二体の合成だったが、後に永井豪が左半身を女性に変更した。

【ピグマン子爵】声 - 矢田耕司
第83話より登場した新幹部。大男 (マサイ族) の体の首から上の部分から小男 (ピグミー族) の上半身が生えている。「ケケケケケケ」と不気味な声で笑う。自身の戦闘力が極めて高いため、特に配下や要塞を持たず専ら単独で行動。全身に火炎を纏って攻撃・口から火を吹く。手に持つ電撃ヤリ・盾から突風・分身・テレポート・妖術・幻術など、人間離れした多彩な能力を駆使して甲児らを大いに翻弄した。笑う時と術を使う時は小男の声、それ以外の普通の会話は大男の声と、二つの声色を持つ。野性が強く、ヘルに対する忠誠心が薄い。第87話で光子力研究所の単身乗っ取りに成功するもヘルを裏切り、最後はZのマジンパワー光子力ビームを浴びて爆死した。その頭部は爆発後に五重塔の先端へ刺さり「晒し首」となった。

マジンガーZ

1972年

【ミネルバX】

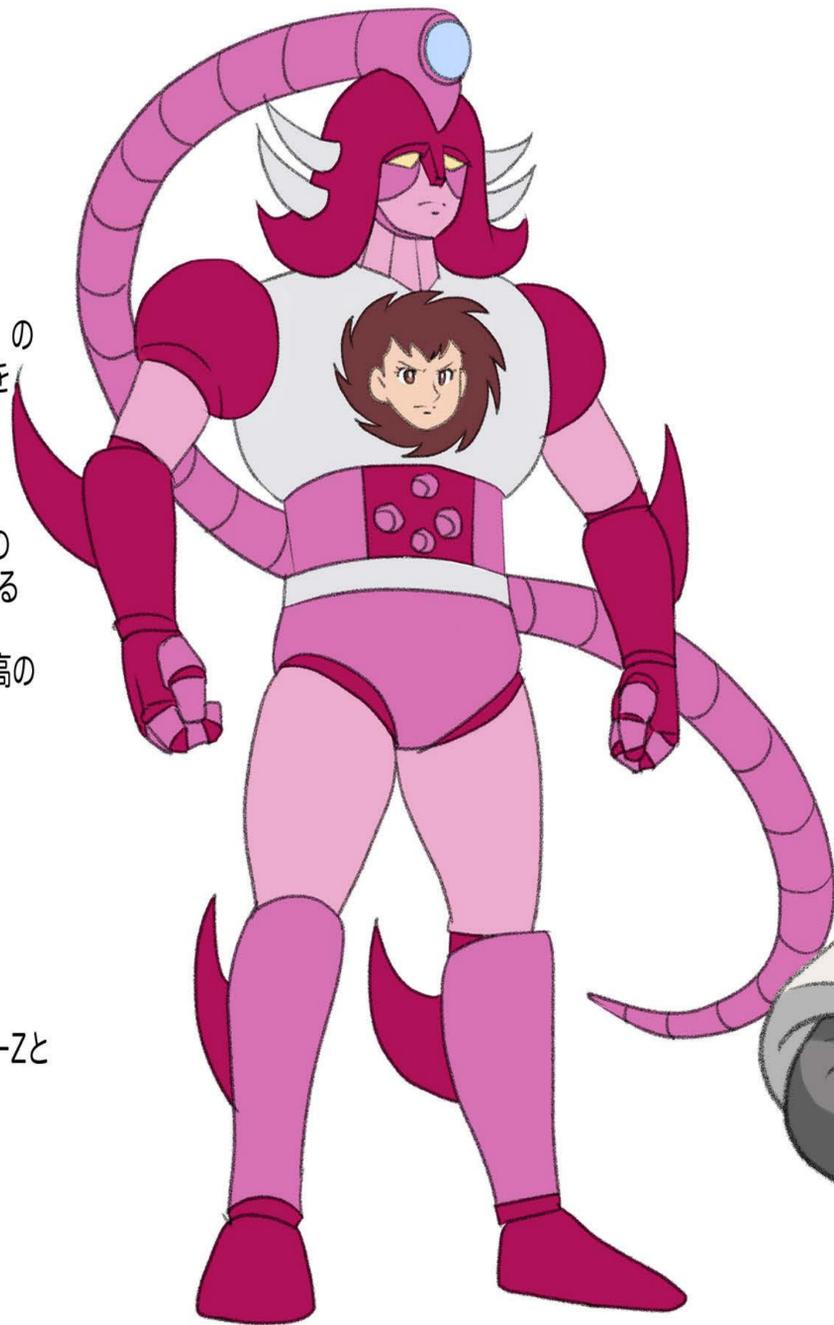
第38話に登場した、マジンガーZを女性化したような機械獣。元々は兜十蔵博士がマジンガーZのパートナーロボットとして設計したもの。あしゅら男爵が襲撃の際に奪った設計図を元にしてDr.ヘルが建造した。ブレストファイヤー、光子カビーム、ロケットパンチ、ルストハリケーンなどマジンガーと同様の武器を装備しているが、素材は超合金ZではなくDr.ヘル製のスーパー鋼鉄。動力も光子力ではなく原子力での代用である。機械獣として現れたが、マジンガーと接近すると、腹部の「パートナー回路」が作動してヘルの制御を受け付けなくなり、マジンガーに友好的になった。しかし、機械獣アーチェリアンJ5の弓矢でパートナー回路を破壊されて暴走。原子力発電所へブレストファイヤーを発射する寸前にアフロダイAのミサイルで倒され、機能を停止した後Zの手で海に沈められた。初めてZに出会った際や倒されてZに抱き抱えられた時には涙を流している（これは内部回路の温度上昇で冷却液が目の隙間から流れ出し、涙のように見える）。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

【ラインX1】

声 - 吉田理保子

第61話に登場したロボット。元々は死亡したシュトロハイム・ハインリッヒ博士（声 - 神弘無）をサイボーグ手術で蘇らせたヘルが、博士に命令して製作させた機械獣だった。だが、その電子頭脳パーツとなるべきアンドロイド（サイボーグ）の少女ローレイをまるで実の娘のように思い始めたことからヘルを裏切り逃亡し、ローレイと共に親子として暮らしていたが、行方を捜していたあしゅらに隠れ家を発見されて博士は殺されてしまう。シローと知り合い仲良くなっていたローレイは博士の死の間際に、自分がアンドロイドであり、シュトロハイムの娘ではないこと、ラインX1と合体することで機械獣を遙かに超える高性能のスーパーロボットとなるという衝撃の事実を告げられ、ライバル兜十蔵博士のマジンガーZを打倒し、ラインX1が史上最高のロボットであると証明することを最後の願いとして託される。自分を生み育ててくれた父の遺志を叶えようと、シローの制止を振り切って合体システムの起動スイッチである頭のリボンを外し、ローレイはラインX1との合体を果たしZに挑戦する。しかし、善戦も空しくZに敗北し、頭部のムチでメインコンピューターとなる胸部のローレイの顔を破壊して自決した。漫画版の「ローレイの歌」篇をラストを除きほぼ忠実に映像化した一編だが、原作での名称は「ドナウα1」で、頭部の表情やボディラインが男性的なデザインになっており、最後はマジンガーZとの交戦の末もぎ取られた自分の頭部を叩きつけられて破壊された。ジャンプ掲載時にはわずかに数ページで決着がついてしまったため、ジャンプコミックスおよびサンコミックスへの収録時の2度に渡り加筆されている。



2021.05.19

<https://majingai.x.fc2.com>

マジンガーZ <https://majingai.x.fc2.com>

1972年

【マジンガーZ / INFINITY】

劇場アニメ作品。世界同時期展開を予定しており、2017年秋から冬にかけてイタリアとフランスで公開された後、日本で2018年1月13日に劇場公開。

作品概要

世界観はテレビシリーズを引き継いでおり、同シリーズ最終話から10年後の世界で再び人類の未来を託されたマジンガーZの激闘が描かれる。なお、『グレートマジンガー』の後日談に相当する『UFOロボ グレンダイザー』については、作中で語られていない。マジンガーZや機械獣などのメカはすべて3DCGで描かれている。メカニックデザインの柳瀬敬之は当初、劇場の大画面を意識して描線の多いハイディテール版を描いてみたが後でアクションが多いことを知り、それに合わせてディテールを調整した版が本編では活躍する。『グレートマジンガー』からは剣鉄也が乗機のグレートマジンガーと共に登場するほか、炎ジュンも彼の子を宿した状態で登場する。また、キャストは一新されているが、テレビアニメ版で兜甲児を演じた石丸博也と、同じく弓さやかを演じた1人である松島みのり、『マジンガーZ対暗黒大將軍』で鉄也を演じた田中亮一もゲスト出演している。プロデューサーの金丸裕によれば、企画は2008年から始まったという。

制作略歴

2017年1月26日にプロジェクトの始動が、同年3月26日にはAnimeJapan 2017でのステージイベントで世界先行公開決定、後述するスタッフや日本語版のキャストなどが、同年8月19日には追加キャストが、同年8月31日には正式タイトル『劇場版 マジンガーZ / INFINITY』と水木一郎による新録オープニングテーマ入り予告編が、同年9月14日にはポスタービジュアルが、同年9月26日には物語の舞台である富士宮市とのコラボレーション決定が、同年11月30日にはオープニングテーマ「マジンガーZ INFINITY ver.」のPVが、それぞれ発表された。

出典:フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

兜甲児声 - 森久保祥太郎

10年前にマジンガーZで世界を救った英雄。現在では父や祖父の後を継ぎ研究者となっているが、その正義感と闘志ははまだ健在であり、復活したDr.ヘルの脅威に対抗するために前線に復帰する。

弓さやか声 - 茅野愛衣

かつては甲児と共に、パイロットとして戦っていた。その後、甲児とともに一時アメリカへ留学する。現在では、父の弦之助の意思を継ぎ新光子力研究所の所長を務めている。

リサ声 - 上坂すみれ

謎の巨大遺跡インフィニティから出現した人型アンドロイドの少女。最初に起動させた兜甲児をマスターと設定したため、彼を「ご主人様」と呼ぶ。名前は、のっそり博士とせわし博士が「Large Intelligence System Agent」の頭文字から取って名付けたもの。アンドロイドではあるが全身の91%が生体パーツでできており、食事も可能で感情豊か。「自分は少女らしい心を持っている」および「そういうプログラムが私にはある」と自覚しており、感情表現も激しいが、出てくる言葉は理路整然としている。なお、格闘性能も高く、ブロックン伯爵には「ガミアQのコピーか」と言われたが、オリジナルだと返している。

剣鉄也声 - 関俊彦

かつて甲児と共に戦い、人類を救ったグレートマジンガーのパイロット。現在でも軍に残り、地球の平和を守っている。物語の冒頭、テキサスでの交戦任務中にグレートマジンガーごと失踪する。

炎ジュン声 - 小清水亜美

鉄也と共に育った元孤児。10年前の戦いではビューナスAのパイロットとして戦った。後に鉄也と結ばれ、彼との子を妊娠している。

マジンガールズ声 - 田所あずさ (オレンジ)、伊藤美来 (グリーン)、ゆいP (ピンク)、オカリナ (ブルー)

統合軍所属のアイドル4人組グループ。その美貌で兜甲児のみならずボスたちや日本国中をメロメロにする比類なき魅力の持ち主。しかし見た目とはウラハラに愛機である色違いの4機のビューナスAを乗りこなすパイロットチーム。

2021.05.20

スタッフ

- 原作 - 永井豪
- 監督 - 志水淳児
- 助監督 - なかの★陽
- CGディレクター - 中沢大樹、井野元英三
- 脚本 - 小沢高広
- キャラクターデザイン - 飯島弘也
- メカニックデザイン - 柳瀬敬之
- 音楽 - 渡辺俊幸
- 美術 - 氏家誠
- 制作 - 東映アニメーション
- 配給 - 東映
- 製作 - MZ製作委員会 (東映アニメーション、ダイナミック企画、東映、バンダイナムコグループ、木下グループ、ADK、KADOKAWA、ワーナーミュージック・ジャパン)

映画マジンガーZ対暗黒大將軍

【製作・スタッフ】

- ・製作： 登石雋一、東映
- ・製作担当： 茂呂清一
- ・企画： 有賀健、籾野義文
- ・原作： 永井豪とダイナミックプロ
- ・脚本： 高久進
- ・作画監督： 角田紘一
- ・原画： 奥山玲子、森英樹、木野達児、金山通弘、小田克也、阿部隆、小松原一男、森下圭介、小泉謙三、飯野酷、津野二郎
- ・動画： 小川明弘、小林敏明、坂野隆雄、服部照夫、薄田嘉信、田村晴夫、山田みよ、長沼寿美子、久保寺輝彦、白川忠志
- ・演出助手： 遠藤勇二
- ・製作進行： 佐伯雅久
- ・録音スタジオ： タバック
- ・現像： 東映化学
- ・演出： 西沢信孝

1974年

『マジンガーZ対暗黒大將軍』（マジンガーゼットたいあんどくたいしょうぐん 英文：Mazinger VS. Dark General）は、1974年7月25日に「東映まんがまつり」にて上映された日本のアニメーション映画作品。キャッチコピーは「テレビでは見られないグレートマジンガー」「七つの軍団を率いて暗黒大將軍の総攻撃が始まった」「ゆけ! マジンガーZ 戦え! グレートマジンガー」

【概要】

テレビアニメ『マジンガーZ』の映画オリジナル作品第2弾。本作では、次作『グレートマジンガー』より主人公・剣鉄也とグレートマジンガーをはじめとするキャラクターたちが登場しており、『マジンガーZ』のテレビ版最終回を先取りした展開となっている。公開当時人気絶頂であったアイドルグループのフィンガー5にあやかり、この夏のまんがまつり興行は「フィンガー5と遊ぼう! 東映まんがまつり」と銘打たれ、フィンガー5の出演映画『フィンガー5の大冒険』がメインに据えられる形で本作が組み込まれている。グレートマジンガーの頭部の形状は講談社の「テレビマガジン」誌上で（「マジンガーズクラブ」会員証のデザインとして）いち早く紹介されていたものの名称までは明らかにされておらず、当時の児童はクライマックスに颯爽と現れたグレートの姿に衝撃を受けることとなった。これは、メディアミックスの走りともいえるべき前代未聞の交代劇である。なお、タイトルと裏腹にマジンガーZと暗黒大將軍が直接対決する場面は無い。また、予告編ではZと戦闘獣軍団が中心になり、グレートマジンガーはシルエットのみ登場する。マジンガーZ側の支援ロボットは、前作『マジンガーZ対ドクターヘル』（テレビプロウアップ版）に引き続きボスロボットが登場するほか、劇場版で初めてダイアナンAが登場する。この後、ボスロボットは次作『グレートマジンガー対ゲッターロボ』にも登場するが、ダイアナンAは2年後の1976年夏興行作品『グレンダイザー ゲッターロボG グレートマジンガー 決戦! 大海獣』まで登場しない。

【ストーリー】

ある日、世界各国の主要都市を謎の巨大ロボット群が襲撃する。それは、ミケーネ帝国の暗黒大將軍によって送り込まれた戦闘獣軍団の先発隊だった。ニューヨーク、ロンドン、パリ、モスクワを壊滅させたその魔の手は、日本にも伸びていた。東京への襲撃に際し、兜甲児はマジンガーZで出動するが、新たな敵・戦闘獣の攻撃力は機械獣を凌駕しており、大苦戦を強いられる。何とか敵を退けて首都の壊滅は食い止めたものの、マジンガーZが大ダメージを受けたうえに光子力研究所も襲撃されてダイアナンAは大破し、兜シローが生死をさまよう重傷を負ってしまう。シローへの大量輸血による最悪の体調の甲児と、修理できないまま再出撃したマジンガーZの前に、獣魔將軍率いる戦闘獣軍団が迫る。死を覚悟した甲児の必死の防戦もむなしく、たちまち満身創痍と化したマジンガーZの窮地に、新たなる勇者グレートマジンガーが颯爽と現れる。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

2021.06.13

<https://majingai.x.fc2.com>